侵略者ゲーム

名無しの元帥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
侵略者ゲーム

【Ｎコード】
Ｎ１５９２Ｓ

【作者名】
名無しの元帥

【あらすじ】
「広大な宇宙には、俺達以外にも沢山の生命体が存在するのさ」
真田雅信は以前に、友人の来須にそんなことを話した。
しかし、その来須は宇宙人の出現によって、死んだ。
地球侵略の為に現われた宇宙人は、「メファール」と名乗り、地球に攻撃を仕掛けてきた。
崩壊する都市、逃げ惑う地球人達、それを見て嘲笑う宇宙人共、地球は大きな危機に直面していた。
そんな中、友人、家族を殺された真田は仲間と共に、復讐を誓い宇

宙人と戦うのだった…。

ゲームの予兆（前書き）

この物語はフィクションです。
しかし、いつか皆さんの身にも降りかかる、紛れも無い現実なのです。

ゲームの予兆

普通の人生程つまらないものは無い。
普通に高校進学して、普通に就職して、普通に結婚して、普通に年老いて死んで何が楽しいのだろうか。だらだらと毎日を過ごし、何時来るか分からない死を待つ人生の、どこに魅力を感じる？人間として生きているのなら、何か大きな事を成し遂げて歴史に名を残すべきではないか。
草木の生い茂る学校からの帰り道。真田雅信は、隣にいる来須智治に向かってそんなことを呟いた。
「めでたい奴だなお前も。そんなことを言ってる奴に限って普通の幸せすら掴めないんだよ」
それに対する来須の返答がこれだ。こっちは真面目に言っているのに偉そうに罵ってくる。
「普通の幸せなんて俺はいらねえな。俺は後世にも讃えられるような、そんな人間になりたいんだ」
真田は誇らしげに言う。
「高校合格も危ういお前が、後世に讃えられるような大物になれるわけがないだろう。もっと現実を見ろ。理想を語る暇があるのなら、少しでも勉強したらどうだ？」
「うっ……」
真田は言葉に詰まる。
真田は小学生の時から、何においても来須には勝てなかった。勉強でも、運動でも、恋愛でも。
中二の時、真田は同級生の女の子に恋をした。しかし、真田は見てしまった。その女の子が来須に告白をしている所を。来須は普通に承諾したらしい。真田は必死に来須を責めた。あれは俺が狙っていた女だったと。しかし、
「だってあっちから告白してきたんだから仕方ないじゃん、断る訳

にもいかないし」
　この一言で片付けられた。中三になった今でも交際は続いているという。
「受験シーズンに彼女とブラブラ遊んでいるお前に言われたくないけどな」
　真田は来須の顔に指を突きつけた。
「最近は交際も控えるようにしている。ただ、彼女の方からデートの催促がしつこくて困ってるんだよなあ。まあ、彼女を持ったことがない真田君には分からないか！」
　ああ、憎たらしい。来須が彼女の話をする度に真田は不愉快になる。来須智治は俺から彼女や青春を全て奪った男なんだ、そう思うと腹が煮えくり返りそうだ。
　空を見て気持ちを落ち着かせる。果てしなく続く青い空を見ていると、彼女や受験のことなんかどうでも良くなってくる気がした。そして、泣きたくなってきた。
　ふと、来須の方を見てみると、そこの角を曲がろうとしていた。
「んじゃ、俺の家こっちだから」
「あ、ああ、じゃあな」
「あ」
　来須が急にこちらを振り返ってきた。
「な、何だよ」
　真田は思わず戸惑う。
「お前、前に言ってたよな、地球以外の星にも生命体は必ず存在するって」
「ああ、誰も信じちゃくれなかったけどな。ＬＥＧＵの隊員の父さんがそう言うんだから絶対いるって」
　ＬＥＧＵとは、来たる宇宙移民のために、宇宙を探索し、研究する団体の総称である。真田の父はＬＥＧＵの隊員の一員であり、現在は地球を離れて、遠い宇宙の星の探索をしている。
「その、いわゆる宇宙人ってのが地球に攻めに来るってのも面白い

かもな」
「は？」
「まあ、俺は絶対に宇宙人なんて信じないけどな」
そういい残して来須は去っていった。超現実主義の来須の口から、そんな言葉がでるとは意外だった。

真田は今、家とは反対方向の道を歩いている。来須と別れた後、何かに引き寄せられるかの様に足が勝手に動き始めたのだ。何処に向かっているのか分からない。引き返そうにも、足取りが速くなるばかりで体が言うことを聞かない。商店街を抜けて、住宅街に出る。結構歩いた筈なのだが、止まる傾向が全くなかった。
真田の足が止まったのは、公園の前だった。水道とトイレ以外には遊具も何も無く、ただ無造作にゴミが落ちているだけの、殺風景な公園だった。
「ここは……」
真田は無意識の内に、公園の中に入っていた。以前、小学生位の時にここに来たことがある。ただ、来た理由も、誰と来たのかも、何をしたのかもまったく覚えていないのだ。いくら頭を捻っても思い出せない。とにかく一度来たことがあるのは確かである。かといって、こんな退屈な公園で特にすることもない。
帰ろうとしたその時、真田の目に妙なものが映った。水道の近くに丸い球のような物が落ちているのだ。近づいてみると、野球ボール位の大きさの、白いカプセルが転がっていた。拾い上げてみると、結構重い。１ｋｇはあるだろうか。思わずよろめきそうになる。中に何が入っているのか気になったが、外郭は完全に白く染まっていて中がまったく見えない。真田は力を入れてカプセルを開けようとする。

その瞬間、頭に激痛が走った。頭を押さえ込む程の痛みが真田を襲う。頭をトンカチで打ち付けられるような痛みだ。視界に写る、

公園の風景が歪む。前方に見える水道やトイレの汚れが取れて、新しくなっていく。記憶を遡っているのだろうか。ぼんやりとしているが、小学生だった頃の真田が目に映る。その横には背の高い男がいて、無邪気にはしゃぐ小学生の頃の真田と手を繋いで公園の中を歩いていた。

何だこの光景は？俺の…過去？真田はいくら頭を捻っても思い出せなかった筈の公園での記憶が蘇るような感覚に襲われる。

「オマエハコノコウエンデ」

何処からか声が聞こえる。とても人間とは思えないような、濁った奇妙な声が頭の中に直接聞こえてくる。やめろ、思い出したくない。来た理由、男の正体、何をしたのか、封印していた筈の記憶が、解き放たれるようだった。慌てて封じ込めようとするが、少しずつ溢れ出していく。

「ヒロワレタンダ」

ヒロワレタ…ヒロワレ…

「やめろおお！！」

真田はカプセルを地面に投げつけた。ピタッと頭痛が消え去り、声も聞こえなくなった。

「何なんだよ一体…」

気味が悪くなり、真田は公園を飛び出した。何故か、右手にはカプセルを持っていた。公園に置いて行った方が良かったのかもしれない。しかし、先程の頭痛と奇怪な声が、このカプセルに関係していないとは思えなかった。

公園を出て、交差点で信号待ちをしている時だった。カプセルの異変に気づいたのは。カプセルの一部分が光っているのだ。明らかにおかしい。最初に拾った時には、ただの真っ白いカプセルだった筈だ。

俺は何をしたんだ…？真田は、まるで自分が爆弾のスイッチを入れたかのような罪悪感に見舞われた。

目を凝らすと、何か数字が刻まれているのが分かる。「87」と刻まれていた。その時の真田には、この数字が何を意味するのかまったく分からなかった。これが地球外生命体と、地球人による殺戮ゲームの始まりだとは知る由も無かった。

ゲームの予兆（後書き）

作品自体が荒削りなので、至らぬ部分もあるとは思いますが、是非感想を頂ければと思います。

侵略者（前書き）

この物語はフィクションです。
しかし、いつか皆さんの身にも起こりかねない紛れも無い現実なのです。

侵略者

「はあ……」

真田は、夕食中に溜め息をついた。完全に箸が止まっている。夕方の事が頭から離れないのだ。

突然の頭痛、奇妙な声、これらの現象が、公園でカプセルを拾って開けようとした瞬間、真田に襲い掛かってきたのである。そして、真田は見てしまった。小学生の頃の自分の姿を。勿論、幻覚である事は間違いないが視界に映っている幼い自分を見ていると、当時の公園での記憶が蘇ってしまいそうで、恐かった。思い出してしまうと、自分自身が壊れてしまうからだ。

あの後、結局カプセルは家に持ち帰ってしまった。カプセルの中身、正体、カプセルに浮かび上がった「87」の数字。それら全てが、好奇心旺盛な真田にとっては興味深く、是非家で調べてみたいと思いたったからかもしれない。

しかし、今になって真田は思う。あの時の俺はどうかしていたと。公園で起こった不可思議な現象の原因は、紛れもなくカプセルなのだ。そんな危険なカプセルを家に置いておくとなると、安全に暮らすことすら難しくなる。あのまま公園に放置しておけば良かったのだ、と今更ながらに後悔する。

「どうしたの？食べないの？」

母、晴美が不満そうに尋ねてくる。現在、父が宇宙を探索中のため、晴美と二人暮らしである。

「いいや、ごちそうさま」

真田はそう言って食器を片付けた。あんな事があったのに、食欲が沸くはずも無い。

「そうだ、今度父さん帰ってくるかもしれないんだって」

部屋を出ようとする真田を晴美が呼び止める。

「え？いつ帰ってくるの？」

「詳しい事は分かんないけど・・まあそのうちじゃない？」
晴美の適当な返事に、真田は呆れる。へえ、と返事を返して部屋を出た。
真田の部屋は2階にある。階段を上がって、部屋についた真田は机に向かっておもむろに勉強を始めた。
私立受験まで半年を切っている。来須の言葉に促されたのか、急にやる気が出てきたのだ。
しかし・・目線がどうしてもカプセルの入ったバッグにいってしまう。いつバッグの中でカプセルがもぞもぞと動き出して、自分に襲い掛かってきてもおかしくない、そんな妄想に囚われて、勉強に集中ができないのだ。
仕方なく、真田はバッグからカプセルを取り出した。そのままベットに寝転んだ。カプセルには相変わらず、「87」の数字が刻まれている。このカプセルの中身がどうしても知りたかった。しかし、カプセルの外郭は完全に白く、中身は全く見えない。カプセルを開けようとすると公園の時の頭痛と奇妙な声に襲われる。
このカプセルの事は誰にも口外してはならない、誰にも渡してはいけない、真田はそう決心する。皆がカプセルをベタベタ触って、第二の被害がでてからでは遅いのだ。
そんな事を思いながらカプセルを見つめていると、瞼が重くなる。
窓の向こうでは満月が自分を照らしている。真田は静かに眠りについた。

強烈な爆発音で、真田は目を覚ました。時計を見てみると1時をまわっている。家の近くで何かがあったのだ。嫌な予感がする。真田は部屋の窓を開けた。1キロ程先で煙が立っている。火事か？だとしたらさっきの爆発音は何なんだ？
真田は慌ててテレビを付ける。何か事故があったのならばテレビでも報道されている筈だ。地元のニュース番組をやっていた。ある

俳優の特集をやっている。
まだ事故のことは報道されていないらしい。仕方が無いので待つことにする。
――――２０分位待った。自分で現場に足を運ぶ方が早いのでは、という程待たされた。地元で事故があったというのに、俳優とまったりトークしている場合か、と番組に腹を立てる。
それから１０分ほど経ってようやくテレビ画面の左上に、事故に関連するテロップが表示された。
「都内の住宅街で事故発生、ただいま状況確認中」とのことだった。こちらとしては早く寝たかったのだが、事故のことがどうしても気になる。目を離す訳にはいかない。
しばらくテレビに見入っていると突然場面が切り替わる。待望の事故現場が上空から映っていた。
「先程こちらの住宅に未確認飛行物体が墜落した模様です」とリポーターが興奮気味に話す。
未確認飛行物体？真田は顔を顰める。次の瞬間、その住宅がアップで映し出された。真田は驚愕した。異様な光景だった。その家にはどこか見覚えがあったのだが思い出せない。
その家に航空機のような、戦闘機のようなものが突き刺さっているのだ。家は全壊状態である。
「この飛行物体は日本製ではないことから海外、もしくは地球外から飛んできた可能性も・・」
リポーターが続ける。地球外からだと？真田は身を乗り出す。思わず涙が出そうになる。今まで真田の宇宙人説など誰も信用しなかった。それでも真田はずっと宇宙人の存在を信じてきた。ついにそんな自分が報われるときがくるかもしれないのだ。
さあ早く出て来い宇宙人、これで俺を馬鹿にしていた奴等を見返すことが出来る！真田は一人、歓喜に浸っていた。
しかし、次の瞬間真田のムードを壊すような一言がリポーターの口から発せられた。

「尚、この住宅には■■さん御一家が在住しており…」
リポーターの言葉は真田の耳には届かなかった。というより真田自身が受け入れられなかったのだ。
「在住していた■■徹さん、瑛子さん、智治さんは救急車で運ばれたのですが
いずれも即死だったということです」
リポーターが軽々しく話す。真田は口を開けたままただ呆然としていた。
思い出した。あれは……来須の家だ。
飛行物体の中に人影らしき物が見えた。リポーター達が詰め寄る。中から誰かが出てきた。「宇宙人だー！」誰かが叫びだした。飛行物体から出てきた者が、地球外生命体だということは、真田にも容易に認識できた。手が2本…足が2本、容姿はそんなに人間とは変わっていない。肌と目の色が違うのだ。肌は灰色に近く、目は眼球も角膜も黒く染まっていた。

なあ・・来須、宇宙人いるじゃねえか…お前が間違ってんだよ…馬鹿にしたこと謝れよ…来須。
あいつの前で思いっきりそう言ってやりたかったが、来須智治はもういない。

侵略者（後書き）

この話で一気に急展開を迎えました。
どこか欠点があったらどんどん御指摘ください（笑）

崩壊する日常（前書き）

この物語はフィクションです。
しかし、何時皆さんの身に降りかかるか分からない、紛れもない現実なのです。

崩壊する日常

宇宙人の出現から一夜明けた。真田は瞼を擦りながらリモコンでテレビのチャンネルを変える。どの番組も、宇宙人の話題で持ちきりである。今日の午前1時頃、宇宙人を乗せた正体不明の飛行物体が住宅街に墜落してきたことは日本、いや、世界中を震撼させた。今、世界中のメディアやマスコミが注目している。

彼らが知りたいことは主に二つ。地球にやってきた「動機」と、宇宙人の住む星の「環境」だ。

それについては様々な情報が飛び交っているが、真田自身も耳を疑ったのは宇宙人が日本語を話せることだ。何故かは定かではないが、テレビに出ていた色々な専門家の話によると、日本人を地球から勝手に連れ去って、日本語教育を強要していたという説もあれば、日本のどこかに、人間に成り済ました宇宙人がいるという説もある。いずれも根拠も証拠もないただの推測でしかないが、有り得なくはない。

しかし、今の真田にとっては宇宙人への興味心より、友人を奪われた怒りの感情の方が強かった。来須とはそんなに親しくはなかったが、小学生の時からの腐れ縁だ。いつも近くにいた友人にもう会えないとなると、寂しさを覚える。おそらくあの宇宙人は、自分の乗ってた飛行物体の墜落によって来須一家が死んだことについて、罪悪感の欠片も感じてはいないのだろう。地球人の常識は通用しないだろうが、いつかその宇宙人を来須の墓の前に連れ出して謝らせたい。それが償いになるのかどうかは分からないが。

家を出て、一人、通学路を歩く。いつもなら来須が「遅せえぞ」と玄関前で膨れっ面して待っている筈なのだが、今となってはそれもない。鬱陶しい奴だったが、いなくなったらそれはそれでまた寂しい。

街を歩いていると、道路のあちこちで交通規制がされている。例の宇宙人は、都内のとあるビルで厳重に保護されているらしい。宇宙人を探そうと、平日にもかかわらず日本中から沢山の人々が詰め掛けているのだ。

そもそもあの宇宙人は、何故一人、単独で地球に来たのだろうか。宇宙人が地球に来た理由や目的については明らかにされていない。真田には引っ掛かるものがあった。沢山のカメラを向けられながら飛行物体から出てきた時の宇宙人の落ち着き払った態度。テレビ越しではあまり表情が確認できなかったのだが、地球人を見下すかの様な笑みすら浮かべていたような気がする。まるで何かを企んでいる様な。

さらに真田には気がかりなことがあった。カプセルに刻まれていた数字が、「８７」から「８５」に減っていたのだ。何故かはさっぱり分からなかった。この数字が、何を意味するのかさえ分からない。とりあえずカプセルは常に持ち歩くことにした。このカプセルは自分で管理すると決めたのだ。

交通規制の影響で遠回りしながらも、何とか真田は学校に着いた。時間にはまだ余裕があったのでゆっくりと校舎に入り、階段を上る。

３年Ａ組の教室の前で真田は足を止めた。教室の中がやけに騒がしいのである。宇宙人の話題で盛り上がっているのだろう、とは容易に想像できるのだが真田は自分のクラスの教室に入るのに抵抗があった。正直、宇宙人の話はもう聞きたくない。テレビを見ていても、家族と食事をしていても、街を歩いていても、何をしていても宇宙人の話は耳に入ってくる。その度に、友人を殺した宇宙人に怒りが沸きあがってくるのだ。宇宙人の話は、来須から聞かされる彼女とのデートの話より不愉快である。

「おい、何やってんのお前」

教室の前で躊躇していると、いきなり後ろから声をかけられた。振り返ってみると、そこにはクラスメイトの池本和志の姿があった。

池本は膨れたお腹をタプタプさせながらこちらに近づいてくる。
「おおっ！真田じゃないか、全然気づかなかったよ」
池本は汗でべっとりした手で真田の肩を叩いてくる。
「いやあ、今まで馬鹿にしてすまなかったよ真田君。別に信じていなかった訳じゃないんだ」
「何の話だよ」
真田は惚けてみせたが、池本が何を言っているのかは分かっていた。池本も真田の宇宙人説を否定してきた奴等の内の一人である。今までは「宇宙人とか信じるなんて幼稚だろ」とか、「俺、宇宙人は存在しないに百万賭けるわ」とか散散言ってきたくせに、宇宙人が現われたとなると手の平を返すかの様に馴れ馴れしくしてくる。
「いやいや、お前いつも言ってじゃないか、宇宙人は絶対存在するって。とにかく、自分の説が当たったんだからもっと堂々としろって。ほら、入るぞ」
そう言って池本は真田の腕を強引に引っ張って教室の中へ引きずり込んだ。
「皆！真田君が来たよお！」
池本が声を張り上げるとともにクラスメイトの奴等が一斉にこちらを振り返ってきた。
「すげえな、真田。まさか本当に宇宙人がいるとはな」
「なあ真田、何で宇宙人が存在することが分かったんだよ」
「真田君。僕は最初から君のことを信じていたよ」
前日まで、真田のことを白い目で見てた奴等が、好奇の目を向けながら好き勝手に言葉を投げかけてくる。やめろ、宇宙人の話はしたくない、真田は耳を塞ぐ。
「うるさいんだよ、もう！」
真田は突然声を張り上げた。クラスの空気が一瞬にして凍りつく。
「ど、どうしたんだよ、いきなり」
「放っておいてくれよ…」
真田を囲んでいた奴等は、つまらなさそうに真田から離れていっ

た。真田はその場に立ち尽くすしかなかった。込み上げてくる涙を、抑えることができない。

崩壊する日常（後書き）

できれば感想と評価をお願いします（、；ェ；、）

宣戦布告（前書き）

この物語はフィクションです。
しかし、いずれ皆さんの身にも起こりうる、紛れも無い現実なのです。

宣戦布告

「宇宙人から、地球人に向けての重大なメッセージがあるようです！　この後午後3時から、全世界生中継でお伝えします！　繰り返します、宇宙人から…」

テレビ越しにアナウンサーが同じ台詞をひたすら連呼している。

自習中だった真田達3年A組は、教室に設置してあるテレビの画面を黙って見つめていた。突然の事だった。池本が先生がいないからと、気まぐれにテレビをつけたらこうなっていたのだ。

「てゆうかいいの？勝手につけちゃって。先生来たら怒られるんじゃない？」

クラスの女子が池本に尋ねた。

「大丈夫、どうせ教師共は職員室でテレビに釘付け状態だろ。俺達の事なんか放っておいてさ」

池本は投げやりに答えた。現在の時間は4時55分、あと5分で宇宙人からのメッセージが全世界に放たれる。テレビ画面には、広い部屋が映し出されていた。そこには沢山の記者達が詰め掛けている。おそらく5分後にはこの部屋に宇宙人が現われて、会見のような形でメッセージが流されるのだろう。

真田はテレビの画面をじっと睨みつけていた。あの宇宙人は、何を喋り、どんなメッセージを発するのか。本来なら不慮の事故とはいえ、無関係な人間を殺したのだから、地球の人達に向けて謝罪の一つくらいするべきである。しかし、宇宙人の謝罪を期待する者などはこの世界、少なくともこのクラスには真田以外、一人もいないだろう。

例の事故で来須一家が亡くなったことはこの学校の全員が知っていた。午前の全校集会で、校長の口から発表された。しかし、その時涙した者や、宇宙人への怒りを露にした者など、これもまた真田以外、一人もいなかった。あくびをしていた者さえもいた。そう、

皆、無関心なのだ。彼らにとって、来須智治の死など、宇宙人の出現に比べれば特に興味を引くことでもないのだ。元々来須があまり目立っていなかったからかもしれないが、これじゃあまりにも報われない。真田は哀れむような目で、誰も座っていない来須の席を眺めた。

その瞬間、テレビから記者達のざわめく声が聞こえた。慌てて振り返り、テレビに目を凝らす。宇宙人が入ってきたのだ。飛行物体から出てきた時と同様に、どこか落ち着き払った態度をしていた。口元が僅かに緩んでいる。真田にはその笑みが、友人を亡くした自分を嘲笑っているかの様に見えた。

「おお、来たあ！」

テレビの音声が聞き取れない程に、クラスで歓声が上がる。何が楽しいのだろうか。宇宙人は、咳払いをした後、空気を大きく吸っている。

「皆、静かに！」

池本が沈黙を促す。

しばらくした後、宇宙人は、とても宇宙人とは思えない程、流暢に日本語を話し始めた。

「ち、地球の皆さん、こんにちわ。ぺぺ…しかし、この『あいさつ』というのは何の意味があるの？ぺぺ…全く理解できない」

宇宙人の声は、人間の声にモザイクをかけた様な、ぎこちない声質をしていた。

「ぺぺ…知っての通り僕は君達から見れば宇宙人だ。ぼ、僕達のことは『メファール』と呼んでね」

宇宙人は偉そうに話を続ける。どうやら、彼ら宇宙人のことを総称してメファールというらしい。

「ぺぺ…僕達の星の環境は、地球とほぼ同じなんだ。お、同じ様に酸素を吸って、同じ様に二酸化酸素を吐くんだ。だから、体の構造も似るんだ」

それに関しては、想定内だった。宇宙の中に星は無数にあるのだか

ら、地球と環境が似ている星があってもおかしくない。
「あなたはどうして地球に来たのですか？」
「あなたは何故、日本語を話せるのですか？」
二人の記者が同時に二つの質問を投げかけた。今、地球人が最も知りたがっている疑問である。
「うーん、面倒だから二ついっぺんに答えよう。僕達の星の王は、日本語を習得する為に5人の使いを日本に送り込んだよ。僕もその使いの一人だった。そして無事日本語を習得し、僕達は自分の星へと帰った。しかーし！」
宇宙人がテレビに向かって人差し指を突きつけてきた。ふざけている様にも見える。
「つ、使いの一人が『ある物』を地球に忘れてしまったんだ」
ある物…？真田の脳裏に一瞬、妙な不安が過ぎった。まさか。そんな訳がない。
「使いの一人が忘れた『ある物』は、僕の星のある儀式に使う大切な物だった。それを探す為、僕は再びこの地に降りた。そういう事なんだよ」
「『ある物』って何なんですかー？そこの所を詳しく」
記者達が宇宙人に詰め寄る。宇宙人は相変わらず余裕ある表情を浮かべている。
「ぺぺ…あまり詳しい事は言えないけど…その『ある物』は■■に入っていて中は見られないようになっているんだ。まあ、野球ボール位の大きさだと考えてくれればいいんじゃない？」
嘘だろ…？思わず息が詰まりそうになる。真田は右手にカプセルを持って、走って教室を飛び出した。冗談だろ？このカプセルは、宇宙人の忘れ物だというのか。間抜けな使いがこのカプセルを忘れたが為に、来須は死んだのか。
「こんな物っ！」
真田はカプセルを床に叩き付けた。しかし壊れる筈もない。
「じゃあ、そろそろ帰るね」

「ちょっ…ちょっと待ってください、まだ話は」
教室の中からテレビの音声が聞こえる。どうやら宇宙人が帰ろうとしているようだ。
「あの家族に謝罪の言葉とかは無いんですか！？」
記者の一人が大声を張り上げた。
「謝罪…？何の事？」
宇宙人の不機嫌そうな声が聞こえる。
「あなたを乗せた飛行物体が墜落したせいで３人の家族が犠牲になったんですよ！　謝罪の一つ位するべきではないでしょうか」
記者が真田の気持ちを代弁してくれた。
「君は地球の規則やルールを僕達に、おしつけようとしているのか」
「は？」
「僕が人間を煮ようが殺そうが、僕の勝手だ。謝る必要などない」
真田は腹が煮え繰り返りそうだった。カプセルを握り締めながら教室の戸を開ける。クラス全員が真田を振り返る。それに構わず、真田はテレビ画面に映る宇宙人に向かって叫んだ。
「勝手だと…お前が俺達を殺すのが勝手なら、俺はお前を殺す！
いいか、俺はお前を、お前らメファールを絶対許さないからな！」
カプセルの数字が、８４に減っていた。

宣戦布告（後書き）

かなりハイペースで書き上げました（笑）欠点等がありましたら御指摘ください。

御感想、評価待っています。

英雄気取りのテロリスト（前書き）

この物語はフィクションです。
しかし、いつ貴方達の身に降りかかってもおかしくない、紛れも無い現実なのです。

英雄気取りのテロリスト

「ほう…いかにも高級ホテルって感じがするな」
安藤圭は、目の前に聳える高層ビルを見上げていた。間違いない。江波の情報が正しければ、ここに宇宙人は在住している筈だ。
あの宇宙人は危険だ。会見にて、宇宙人が去り際に記者達に向けて放った卑劣な一言。何も知らない人間からしてみれば、冗談にしか聞こえないのかもしれないが、安藤は知っていた。奴は何かを企んでいる。宇宙人が何らかの陰謀を企てているのなら、何としても阻止しなければならない。誰もやらないのなら、自分がやる。そして地球を救った英雄となるのだ。そう、英雄に。
宇宙人が在住しているというのに、ビルの周辺の警備は薄い。おそらく、これは罠だ。中に入ると、沢山の警備員が銃を向けて待ち構えているに違いない。安藤はビルの後ろ側に回る。江波の言っていたとおりだ。駐車場の近くに、地下へと続く階段を発見した。この階段を進むと、入り口を通らずにビルの内部に入ることができる…らしい。
江波は、安藤とは古くからの旧友であり、今では大手の警備会社の警備監を務めている。そんな彼の警備会社が、宇宙人の警備を任されているという事を知った真田は、思い切って江波に今回の計画の話を持ち込んでみた。自分の敵となる警備会社に、計画を全て晒すというのは、正直抵抗があったが、警備監である江波の協力無しでは計画の実行は難しい。すると、どうやら江波も宇宙人に不信感を募らせているらしく、無償で協力してくれる、とのことだった。
江波を味方にしたのは正解だった。江波の言うとおりに、階段を下まで下りて、ドアの前のパネルに指定の番号を入力するだけで、何の邪魔もなく、容易くビルの内部に侵入できた。
正面にはエレベーターがあった。江波の情報によると、宇宙人は３１０６号室にいるらしく、部屋に行く為には、このエレベーター

を使って３１階まで昇らなければならない、そう思うだけで気が遠くなる。
　しかし、中に入ってボタンを押そうとすると、上限が２０階までしかない。これはどういう事だ。江波との会話の内容を探ってみる。思い出した。確かこのエレベーターで２０階に上がった後、他のエレベーターに乗り移れ、と江波は言っていた。面倒だな、と思いつつも安藤は２０階のボタンを押した。
　エレベーターで昇る途中、安藤は考えていた。自分のやろうとしている事は、本当に正しいのか。宇宙人が地球侵略の陰謀を企てている、というのは所詮、自分の根拠の無い推測にすぎない。周りにこの事を話しても、笑われるだけだ。世間の言う通り、単に「ある物」を取りに来ただけなのかもしれないし、日本語を独自に学習していたのも、地球人と近づきたかっただけかもしれない。
「地球人を煮ようが殺そうが、我々の自由だ」
去り際に記者に放った宇宙人の台詞を口ずさむ。この言葉も、記者の鬱陶しさに怒りを覚えて、衝動的に出てしまった言葉なのかもしれない。だとしたら、自分のやろうとしている事は、間違っているのか。計画を実行したところで、地球は平和になるのだろうか。俺は英雄になれるのだろうか。
　そうこう考えている内に、２０階に着いたらしい。「ピンポーン」と音が鳴り、ドアが開く。
　安藤は思わず声を上げそうになった。正面に警備員が二人、立っているのだ。二人はこちらを見つめているが、警戒している様子はない。そう、こんな場合を想定して江波から警備員用の制服を、貰っておいたのだ。制服を着用すれば、警備員を装うことができる。つまり、怪しまれることは無い、筈だ。
　安藤は動揺を隠しながら、ゆっくりと前に進む。平然と警備員の横を通り過ぎようとした時、警備員の一人に肩をつかまれた。
「あんた、ここの者じゃないだろ。うちもこの仕事長いからさ、警備員一人一人の顔くらい、覚えてるのよ」

「やれやれ…避けては通れない、か」
その瞬間、安藤は右ポケットから護身用スタンガンを取り出して、その警備員の腹に突き刺した。そしてスイッチを入れる。
「うご…がああ」
警備員の一人は、喚きながらその場に倒れこんだ。
「こ、こいつ…動くな！」
もう一人の警備員は、あたふたとしながら拳銃を腰から取り出そうとしていた。警備員が銃を構えた瞬間、安藤は持っていたスタンガンを宙に投げた。警備員の視線が宙を舞うスタンガンに注がれた瞬間、間合いを詰めて鳩尾に蹴りを入れる。
「ぐあ…うぐっ」
先程の警備員と同じように、ゆっくりと倒れた。格闘技を習得している安藤にとっては、素人である警備員を倒すことくらい、容易かった。
「こいつは貰っていくぜ」
安藤は警備員が握り締めていた拳銃を拾い上げて、エレベーターに向かって走り出した。
「無駄だ」
後ろから、警備員の掠れた声が聞こえる。振り返ってみると、さっきスタンガンで気を失っていた筈の警備員が、仰向けの状態でこちらを睨んでいた。
「あんたが何を企んでいるのかは知らないけど、上にはまだ警備員がうようよしてるよ。ここでひきかえした方が、身の為だと思うだけどね」
「ご心配無く」
ジリリリリ…ジリリリリ…ビル中に騒音が響きわたる。サイレンだ。
「何だ、何が起きている！？」
警備員はじたばたしながら、辺りをキョロキョロしている。
「1階辺りで爆発が起きたんだろう。警備員共の注意を逸らす為に、入り口の辺りに仕掛けておいたんだよ、爆弾を。これで宇宙人の警

備は疎かになる筈だ」
「何の為に…こんな事を」
警備員が充血させた目をこちらに向けてくる。
「英雄になる為さ」
そう言って、安藤は３１階行きのエレベーターに乗り込んだ。ドアが閉まる直前に、警備員が「頑張れよ」と言っていたような気がするが、おそらく気のせいだろう。
エレベーターで昇っている時、サイレンの音が鳴り止んだ。何故かは分からない。静けさが辺りを漂う。急に背筋に悪寒が走った。覚悟を決めて来た筈なのに、これから自分のしでかす事が世間にどんな影響を与えるのか、想像するだけで恐くなる。帰れるなら帰りたい。しかし、エレベーターは止まらない。
音が鳴りエレベーターが開く。正面に人影が見える。エレベーターから数メートル離れた所に、江波は立っていた。
「よくここまで来れたな、安藤」
江波は、褒めるような、馬鹿にするような口調で言った。
「全てお前のお陰だよ」
「いや、よく頑張った。お前はよくやったよ、でも…」
次の瞬間、思いもよらない、信じ難い言葉が江波の口から放たれた。
「悪いけど、ここで死んでもらえるかな、安藤君」
そう言って江波は、腰の辺りから拳銃を取り出し、銃口を安藤に向けてきた。どういう事だ？何を言っているのか分からなかった。というより、理解ができなかった。
「何の冗談だよ」
「冗談じゃねえよ。いいか。俺も最初はお前の計画に賛成だった。だが、警備会社の立場から見ると、お前はただのテロリストでしかない。つまり俺達の敵だ。敵に計画を実行されると、当然大きな失態だ。会社の存続すら危うくなる。つまり、お前に計画が実行されると困るんだよ」

「なら何故俺に協力したんだ…」
「手柄だよ。そこら辺の下っ端警備員に捕まってもらっても困るからな。警備員を振り切り、ここまで来たお前を俺が撃つ、そういうシナリオが欲しかったんだ。友情より手柄をとった、それだけの話だ」
江波は不気味な笑みを浮かべながら、軽やかに話す。
「な…酷すぎるよお前」
「死ね」
江波が引き金に力を入れる。安藤は慌ててエレベーターに戻り、ドアを閉めようとする。しかし、ドアが閉まる直前に、江波が銃を発砲してきた。発砲された弾は、ドアの隙間を通り安藤の左肩に直撃した。
「ぐっ…」
弾は安藤の肩にめり込み、体の中に入っていく。二発目を撃たれる前にドアは閉まった。安藤は閉めるのボタンを連打しながら、左肩をタオルで止血する。何故なんだ。何故彼はあんな風に変わってしまったのだろうか。
「いいか安藤。英雄を目指している時点で英雄失格なんだよ」
学生時代に、食堂にて江波に言われたことを思い出す。確かにそうかもしれない。
「俺はただの英雄気取りだ…」
そう呟いた瞬間、思い出した。バッグの中からある物を取り出した。安藤が子供だった頃大好きだったヒーロー、ヘルパーマンの変身ベルトだ。ベルトからは光が放射される。暗い所での照明代わりにと、持ってきていたのだ。ベルトを腰に巻く。不思議なことに、心地よい。ヒーローになれた気分だ。
勇気と使命感が沸いてくる。倒すべき相手は旧友の江波。力を貸してくれよ、ヘルパーマン。
安藤は、ゆっくりと「開ける」のボタンを押した。

英雄気取りのテロリスト（後書き）

敢えて結末は伏せてあります。次回、他の人物も絡めて明らかにするつもりです。

御感想、できれば評価もお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1592s/

侵略者ゲーム

2011年5月4日16時05分発行